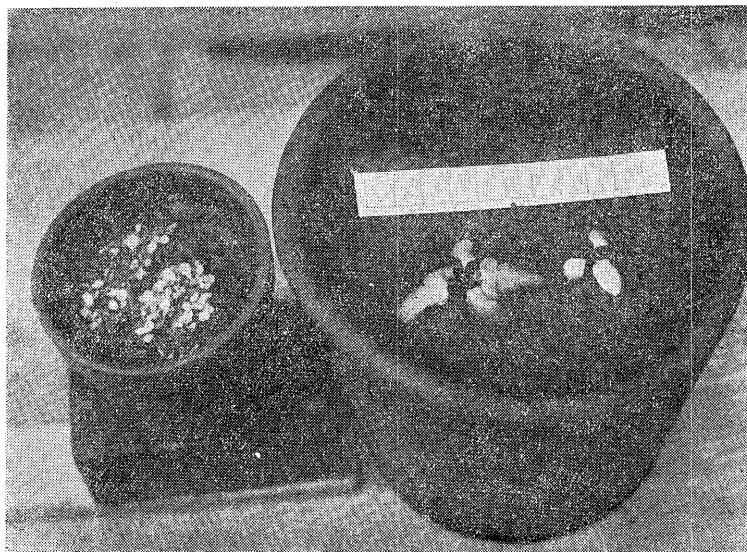


○コモチシダの無性芽の培養 (伊藤洋) Hiroshi ITO: Sporophytic buds of *Woodwardia orientalis* can grow up.

コモチシダ (ハチヂョウカグマも同様) の葉にはその名の如くたくさんの無性芽が出来る。シダ類の無性芽は大概中肋の先か途中に少數出来、無性繁殖に役立つているのが普通であるがコモチシダのそれは葉の表面にやたらにたくさんつき、こぼれ落ちることは確かでもそれから先大きくなるか消えてしまうかあまりはつきりしない。コモチシダの生えている場所には小さい子供も多いが果して無性芽によつたものか判断しにくいことが多い。それで私は去年の8月初め千葉県三石山でとつた勢のよい材料を用いて栽培を試みた。小さい植木鉢へ普通の土を入れ(ミズゴケではうまく行かなかつた)長さ1寸ばかりに小羽片をち切り半分位土に埋る程度に植える。この小羽片にはもち論圖の如



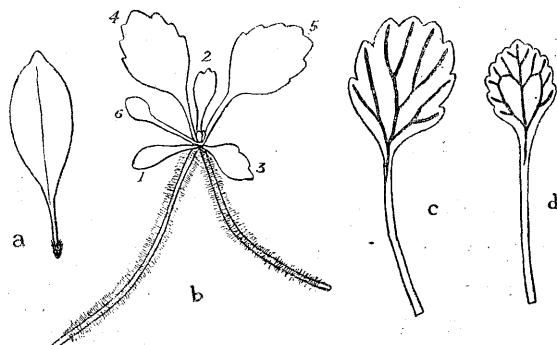
説明は本文にある。物差しは 10 cm (10月5日撮影)

様な無性芽がたくさん着いたまゝ並んでいる譯。濕氣を保つ爲植木鉢にはシャーレでふたをし全體を水盤に入れておく。2週間もすると小羽片の部分はだんだん腐つて来るが無性芽の方は青々としていてやがて新しい芽が出るようになる。葉が2, 3枚出てあまり大きくならないうちに冬が来て寒くなり水もからしたりしたので殆んど消えそうになつた。結局生き残つたのは2株で今年の夏は大きくなりもう親の形を具えて來た。寫眞の右側の大きい鉢のがそれである。

次に寫眞の左の小さい鉢のは今年の9月初めに試みた分で、この春四國の足摺岬から採つて來た株を東京で栽培しているうち無性芽が着いたので材料とした。所がこの方の

無性芽は去年のと違つて3~5枚の葉が既に出ていて、栽培するとじき新しい葉が出、立派な長い根が1~2本出て小さいながらも一人前の獨立した株になる。圖のbはそれを書いたもので1~5の葉はもとからのもの6は新しく出た葉である。このうちもとからの1~5葉は硬いが6の葉は非常に軟い、又前者はすべて叉状脈で結合しないが後者のものは親株の葉と同じく網状脈になるのは面白い。これから寒さに向つてどの程度成長するか見物であるが今年のは去年と比較して非常に活着し易い。これは去年はビルの2階、今年は庭の木の下と

いう條件の違ひも考えられるが材料の違うせいかとも知れない。あとで気がついたがこの足摺のコモチシダの植つている鉢には自然に落ちて生えたらしい、b圖そつくりの子供がコケの間に幾つもあるので(前葉體から出來たのでない證據は幾つかある)自然でも無性芽によ



コモチシダの無性芽。a, b 共に説明は本文、c は 5 の葉、d は 6 の葉。a, b×7, c×10, d×17.

る繁殖が出来ることがわかつたが、今年の様な無性芽は活着し易いのかとも考えられる。普通コモチシダの無性芽といえばa圖の様なものばかりの様に考えていたが、a式のものがやがてb式のものになるのか、b式のは又別の型か少しくあやしくなつて來たのでここでは以上の事がらのみ報告することにして色々お教えを仰ぎたいと思う次第である。

附記。藤田哲夫氏は昭和7年本誌8(3): (123)~(129)に「こもちしだ、無性芽に就て述べる」と題して、無性芽を葉面より取り離して土を盛つた鉢に植えたらよく活着したこと(2週間に約90%の新株形成を見た、しかし5カ月生存したものは非常に少かつた)、植え方によつて活着の工合が違い水分が最も必要なこと、無性芽落下の機構がうまく出来ていることなどについて報告されている。この時の無性芽は圖によるとb式のものであつたようである。

○ホホヅキの古名カガチに就て：(藤田安二) Yasuji FUJITA : Remarks on "Kagachi," the old Japanese name of *Physalis Alkekengi* L.

我國に於けるホホヅキ(酸漿)の古名はカガチ又はアカガチであつて、1) 古事記の有名な文句に八俣遠呂智の目が赤加賀智(あかかがち)なしとあり、この赤加賀智は今のほほづき也と註しており、日本書紀にも亦ほほ同様な記事が見られる。和名抄にはこのものの語原を赤赫都實(あかかぶつみ)より来るとなすが、著者は決してそうとは思はない。かくの如きは實に單なる語原の俗解に過ぎない。